

さざなみ

須崎市教育研究所 発行
第16号 令和7年2月17日

第3回不登校・不登校傾向対策委員会

2月13日（木）に第3回となる不登校・不登校傾向対策委員会を実施いたしました。今回講師としてお招きしたのは一般社団法人 ひとみ学舎の代表理事 居上公美子先生です。

居上先生は徳島大学教育学部をご卒業後教職に就かれ、在職中に鳴門教育大学 大学院 学校教育研究科 修士課程を修了されました。公立小学校・鳴門教育大学附属支援学校の教員として28年間勤務されていましたが、「子ども一人ひとりと向き合い、自分が納得のいくかわりをしたい」と一念発起し退職。学校に行けない子どもたちの居場所を作ろうと2015年4月にオルタナティブスクール「ひとみ学舎」を開設しました。



ひとみ学舎

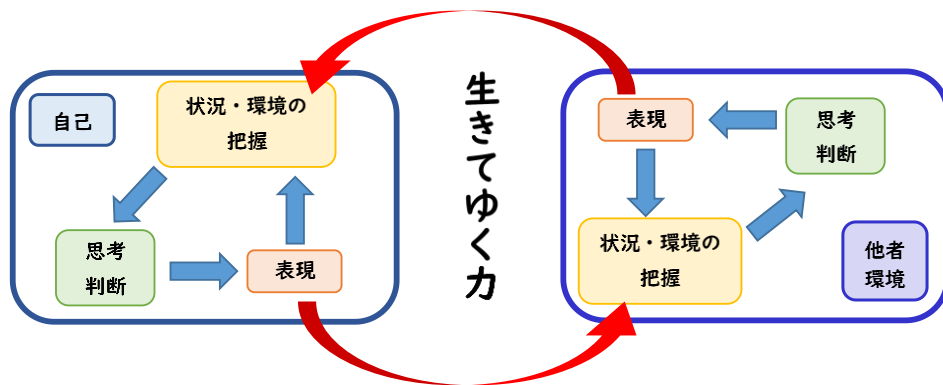
既存の社会の中で生きづらさを感じている子どもや大人に対して、彼らが自分の特性に気づき、それを生かして他者と一緒に自分らしく生きていくための支援をすることを主たる目的として活動しています。

ひとみ学舎ホームページ

<http://hitomigakusya.wixsite.com/hitomigakusya>, (引用 2025-2-18)

居上先生の根底にあるのは「日本の現在の教育システムというのは、数々ある教育システムの中の1つでしかなく、それに合わないからと絶望する必要はない」というお考えでした。そのうえで「子どもたちには自分の人生をしっかりと生きていけるようになってほしい」と願っています。

実際にひとみ学舎で居上先生が関わってこられた子どもたちの例もお話しいただきました。子どもたちは私たちとは全く異なる感覚で物事を感じ、認識し、表現しており、大人や社会の対応次第では私たちの想像をはるかに超えるしんどさを感じているということを大人が知っておくべきだと仰っていました。特にASDやADHD、SLD等の診断がおりている子どもたちのしんどさは、私たちが想像している以上のものだろうとのことでした。



ひとみ学舎では、子どもたちが他者や環境と関わり続ける力「生きてゆく力」を伸ばすために支援を行っています。このとき、不適応を起こしている子どもが「状況・環境の把握」「思考・判断」「表現」のどこに課題を抱えているかを分析し、そこにアプローチすることで図のような循環をうまく回せるよ

うに支援をするとのことでした。もちろん、こういった分析には時間と知識が必要で、いつでもできることではないかもしれませんが、このように焦点化することで、見えるものもあるのではないかと思います。すでに実践されているコグトレやSST、アサーショントレーニングやアンガーマネジメント等もこれらのどの部分にアプローチしているのかを意識することでより効果的なものになるかもしれません。



グループ協議では各校での困り感や、具体的な児童生徒への対応の検討などを共有しました。会が終わってからも講師の先生に入っていたいで相談をするグループもありました。

【委員の感想より一部抜粋】

▶小規模校の利点を活かして、個々の子どもにあった支援方法を学校でも協議し、子どもたちが居やすい環境を整えていけるように頑張りたいです。また、グループ協議では、自校の生徒について考え、ご意見をたくさんいただき、大変ありがたかったです。

▶講話や終了後にお話を伺ったなかで、指導者の資質として、物事を前向きに捉えられることが必要であると感じたし、そうなりたと思った。

▶講話では、居上先生の「何ができる・できないではなく、どうやって生きるかが大事」「(学校という)一つの集団に合わないだけ。」というお話が大変印象に残りました。学校に来てほしいという思いは捨てきれませんが、「この子がよりよく生きるために」という長く広い視野をもって、生徒らと関わるのが大事であると感じました。これからますます「医療機関や支援センターなど各機関との連携」が必要となり、学校内外の「繋ぎ」としての役割が養護教諭に求められることも増えていくと思います。今日の研修で学んだ(考えた)ことを今後にかしていきたいと思います。

▶特性自体がしんどいのではなく、しんどくさせているのは大人や社会の対応なのだということがわかった。本人が自分の特性を生かして自分らしく生きていくことができるようにサポートできる人になりたいと思った。自分だけではなく、他の人を巻き込んでいく力も必要だと思った。

▶学校現場において、特性があるこどもが何かができるようになる指導・支援をするのではなく、どうやって生きていくのかを伝える・生きていく力を育む支援をすることが必要であると学びました。また、私のグループは養護教諭の集まりで、私自身も養護講師をしているため、みなさんが養護の立場で特性があるこどもにどのような働きかけをしているのかを知ることができ、学びのあるグループ協議となりました。

